

Bimonthly for Guitar

Armonia

Vol. IV No. 1

Jan.-Feb. 1957

第四卷第一号 (通刊19号)

アルモニア

昭和三十一年一・二月



Editor : Dr. Isao Takahashi (Sakamoto, Miyagiken, Japan)

Associate editors : Seiichi Konishi, Jiro Nakano.

2 月に小船幸次郎氏の指揮する横浜交響楽団が阿部保夫氏を迎えてテデスコのギター協奏曲を本邦初演する。越えて 5 月には山田忠男氏の指揮する京大交響楽団が山内広志氏を独奏者として同じ曲を演奏する予定だそうである。テデスコの協奏曲の東西競演となるわけである。

今年は又東京、大阪、福岡の三都市でコンクールが開催される段取りになっている。新人の登場が期待される。

ギター音楽の隆盛は世界に共通した現象だが、わが国でも漸くその軌道に乗った感がある。Debussy が一番美しい楽器だが残念なことに演奏が大変難かしいと言ったギターである。De Falla はギターは最も多彩な最も豊かな楽器であると言ひ Massenet はギターは完全な楽器であると言った。そのギターの真価を発揮するのはまさにこの時であると思う。

目 次

第四巻第一号

(通刊十九号)

現代ギター音楽の動向……………	高 橋 功 ……(1)
クラシックギター時代…………… W. Ch. Lekberg ……	高 橋 功訳…(3)
Andres Segovia …… B. Gavoty ……	高 田 三 九 三訳…(5)
メツセージ ……	Mario Castelnuovo-Tedesco…(10)
テデスコのギター協奏曲の初演に際して……………	小 船 幸 次 郎 ……(11)
ラミレス一門……………	荒 井 史 郎 ……(17)
ラミレス礼讃……………	岩橋正和・伊東尚生・望月和市朗 山本 翰・縄田政次 ……(21)
中林淳真氏のリサイタルに想う……………	安 達 右 一 ……(25)
アルゼンチンのギター界近況……………	佐 藤 志 智 子 ……(26)
海外ニュース……………	…(27)
国内ニュース……………	…(29)

添附写真 Segovia, Ramirez-Family, S. Behrend

添附楽譜 Miguel Abloniz; Capriccio No. 3

表紙図案 中 野 二 郎

主筆：高 橋 功 編集顧問：小西誠一・中野二郎

現代ギター音楽の動向

Repertory of Siegfried Behrend

高 橋 功

I. Takahashi

最近ベルリンの Dr. Walter Funk から手紙に添えて一包の印刷物が送り届けられた。それはジークフリート・ベーレンド Siegfried Behrend を推薦する一文と彼の演奏会プログラムや批評を集めたパンフレットなどである。ベーレンドは本年23才の新人である。ドイツ人を父とし、ラトビア人を母に持ったベーレンドは西ベルリンで育ち、16才のとき Kindworth-Scharwenka 音楽学校に学び、所定四年間の課程を二年で卒業したというから、その才能は無類だつたわけである。1952年4月ライブチヒで第一回のリサイタルを持つたが、その時僅かに18才であつた。ギターを手にしてから僅かに十ヶ月でリサイタルを持つたというのだから、その上達ぶりからみて、よほど天才的だつたと考えられる。もともとドイツにはすばらしいギターの演奏家はいなかつた。Heinrich Albert は先生としてはすぐれていたが、演奏家としてはそれほどでなかつたらしいし、Henze (Karl と Brunoの父子) も独奏家としてよりも、作曲家や教本の編者としての方が有名である。そのドイツのギター界に、若冠18才のベーレンドが、突如としてあらはれたのである。そしてベーレンドは演奏の会を重ねるごとに輝きをまし、まことにダイヤモンドのように燦然と光を放っているのである。1952年のデビュー以来約二年間にロドリゴ作アランプエス協奏曲を54回も演奏している(中40回はベルリンフィルハーモニー、他の14回は地方都市の交響団との協演)記録をみれば、その演技のほどが推測されるであろう。

Nicholas Carroll の印象(B. M. G. 誌1954年度6月号所載)によると、明朗な青年で、精神的で健康そのものらしく、魚釣りが大好きで、社交的であつて、所謂天才とか神童とか呼ばれるような点はない。どちらかというとなんげかというよりは、線の太い型の芸術家のようである。

独奏家としてのベーレンドのプログラムには次の作曲家達の作品が見られる。

所謂古典音楽では、J. S. Bach をはじめ Fr. Campion, John Dowland, Roberto de Visce, Joseph Haydn, Mauro Giuliani, Luigi Legnani, Ferdinando Sor があり、近代音楽では Isaac Albeniz, Enrique Granados, Manuel de Falla, Moreno Torroba, Joaquin Rodrigo, などのスペイン派は勿論、フランスの Claude Debussy, Maurice Ravel, イタリアの Mario Castelnuovo-Tedesco, ドイツ系の Fr. Karl Grimm, Heinz Fr. Hartig, Rudolph Wagner Regeny, Gerhard Schumann などの作品である。

しかしベーレンドのレパートリーで特に目立っているのはギターと他楽器との組合せである。ベーレンドのギターと、プロツクフレーテのリンデ・フエフェル・フォン・ウインテルフェルド Linde Höffer von Winterfeld の二重奏はベルリンの室内演奏会の名物になつている。そのプログラムは

第一部

1. Henry Purcell 作 組曲(二重奏)
2. Joh. Seb. Bach 作 組曲(ギター独奏)
3. Walter Rein 作 黒雲変奏曲(二重奏)

第二部

4. Joaquin Turina 作 スペイン組曲(独奏)

5. Joh. Nep. David 作 変奏曲 (二重奏)
6. Siegfried Behrend 編作 十六世紀リュート音楽選 (独奏)
7. Georg Fr. Telemann 作 ソナタ (二重奏)

ギターとヴァイオリンの二重奏としては次のものがあげられる。

Joh. Seb. Bach 作 コンチエルト第一、第二番

Nicolo Pagauini 作 五つのソナタ

Christian Gottlieb Scheidler 作 ソナタ

又ギターをふくむ室内楽としては、古典音楽として次のものがレパートリーに加えられている。

Luigi Boccherini 作 ギター五重奏 (第一、二、三)

Joseph Haydn 作 ギター、ヴァイオリン、ピアノ、セロの四重奏

” ギター、ヴァイオリン、セロのカツサシオン

Wenzel Matijegka 作 ピオラ、ギター、フルートのためのセレナーデ

Fr. Schubert 作 フルート、ギター、ピアノ、セロのための四重奏

Karl Maria von Weber 作 フルート、ギター、ピアノの三重奏

ベーレンドのレパートリーで最も注目値するのはギター協奏曲及びこれに類する曲が多いことである。古典音楽の中では次のようなものをベーレンドは演奏している。

Mauro Giuliani 協奏曲 (作品30)

” ” (“ 70)

Ferdinando Carulli 協奏曲 (ベーレンド編作)

Antonio Vivaldi 作 協奏曲 (ベーレンド編作)

Ferdinando Sor 作 変奏曲 (“)

ベーレンドは又現代作家のギター協奏曲を好んでいるが、中にはベーレンドに捧げられたものもある。Mario Castelnuovo-Tedesco の作品99ニ調の協奏曲 (1939年作) はセゴヴィアに捧げられたものだが、作品 160 ハ調の協奏曲 (1953年作) と作品 118 ギターと室内オーケストラのためのセレナーデ (1943年作) と作品 152の Federico Garcia Lorca の詩によるギターと混声合唱のための シブシー風ロマンツエロ (1951年作) は何れもベーレンドに贈られたものである。テデスコはその外作品 170 の挨拶状の第五番 Rondel をこのベーレンドに贈っているし、Maurice Rowel の「死せる王女のためのパヴァーヌ」や Claude Debussyの「旅音楽師」をベーレンドのために編曲していることも特筆に値する。

Concierto de Aranjuez の作者 Joaquin Rodrigo はギターと管絃楽のための組曲及びギターと混声合唱のための連作をベーレンドに贈っている。共に1956年の作である。

1907年9月10日カツセルに生れた Heinz Friedrich Hartig は1948年以来ベルリン高等音楽院の作曲科教授で、協奏組曲1954年は、翌年 Otto Matzerath 指揮ベーレンドの独奏で放送初演され好評を博したが、勿論ベーレンドに捧げられたものである。この外1956年作ギターと合唱のための協奏曲はベーレンドと Waldo-Favre 合唱団に捧げられているが、今年四月ベルリンで初演される予定で、大いに期待されている。

Gerhard Schumann もベーレンドのためにギター協奏曲を作曲しているし、Mario Medina もベーレンドのためにムルシア風協奏曲を作曲しているという風で、ベーレンドのレパートリーでは全く協奏曲ブームの感がある。その外 Jene Takacs のバルティタや

(以下9頁につづく)

クラシックギター時代

W. Charles Lekberg

The Classic guitar comes into its own (Etude, Oct. 1955)

Franz Schubert は「ギターは非常にすばらしい楽器だけれども、それをわかっている人は殆んどない」と書いる。これは十九世紀のことで、当時はそうだったに違ひない。その頃 Schubert は非常に貧乏でギターだけを相手に作曲をし、ベツトのわきにギターを置いて、毎朝それを弾いていたのであつた。しかし近年は全世界の音楽家達はギターがほんとうにすばらしい楽器であることを理解して来た。そしてギタリスト達はそれを理解させるために大いに尽力して来た。

ギターは今や世界の楽器である。1952年に結成された国際クラシックギター協会は、ヨーロッパは勿論、南アフリカ、アメリカ、オーストリア、そして日本からも支持を受けている。日本のギターの貢献者達は隔月刊 *Armonia* を刊行している。

クラシック（又はスペイン）ギターは、すでに十三世紀以降現在の形を整えて、西欧諸国では多少知られていたが、その後、それがすぐれた楽器として認められるまで何世紀もかゝつたのは何故か、それがギター愛好家にとって大きな疑問であろう。それは恐らく、長い間民俗楽器として安んじ甘んじて来たために、広く音楽界に受け入れられなかつたのであろう。エジプトやバビロンのリラ、古代ギリシヤの *Pandoura*、トルコやインドの三絃 *Tamboura* などが、現代ギターの祖先である。東洋の流浪の民が八世紀頃これらの絃楽器をヨーロッパに持ち込んだ。しかしこの東洋の音楽が、ほんとうにヨーロッパに根を生やしたのは十一世紀の侵攻以後といつていい。この侵攻者達が古代ギリシヤの *pandoura* 即ち *Kithara* を齎したのであつた。ギターは、もともと八世紀以前ローマの商人達がスペインに持つて来、スペインですでに現在の形態を有していた。ムーア族の絃楽器 *al ud*（木の意味）がスペインに渡来し、それがスペインで非常に歓迎された。この *ud* はリュートとして西部及び中部ヨーロッパに普及した。十六世紀には、スペインの上流社会では十一絃の *Viuhela* が喜ばれた。当時ギターは四絃で、民衆の間にとどまつていた。ギターに第五絃が加えられたのは十六世紀で、それが一般にスペインギターと呼ばれるようになったが、その頃からヴィウエラはすたれ出した。そして十七世紀にはヴィウエラは殆んど姿を消し、ギターが一般的な楽器となつた。

フレットはもともとギターのネックの周りに羊腸線で結ばれたものであつた。左指の押え所を示すのには、平たい指板よりも、ネックに巻いたフレットの上の方が明瞭であるわけである。これは、バツハの所謂平均律クラヴィアが完成される何世紀も前には、このフレットが和音の進歩に極めて重要な役目を果たしたのであつた。

ギターは間もなくドイツに入つた。ワイマール太公妃 Anna Amelia (1739—1807) がギターを手にし、宮廷楽人 Johann Gottlieb Naumann の指導を受けた。太公妃はすぐれた奏者になり、ギターのために作曲もした。Carl Maria von Weber もすぐれたギタリストで、ギターとピアノの作品を沢山作曲した。ギター伴奏歌曲は90にも及んでいるし、自作のオペラにもギターを取入れた。Rossini も Verdi も自らギターを手にし、前者は「セビリヤの理髮師」の *Almaviva* のアリアにギターを伴奏とし、後者は「オテロ」の第二幕にギターを使つた。Paganini は少くともギター独奏曲を140以上作曲し、その外ヴァイオリンとギターの二重奏曲を多数、ギターをふくむ三重奏曲、四重奏曲を十数曲も作曲した。Hector Berlioz はギターを「小さなオーケストラ」と呼び、パリで数年ギターを教へもし

た。彼は「編成学」で「ギターは複雑な多声の音楽に非常に適したものである」と書いている。

現代のクラシックギターは、例へばカウボーイやニューヨークの下町で掻きならされているようなものではなく、性能のよく吟味された立派なものである。形は大きく、共鳴板の広いところは14吋もあり、胴体も大きく、サウンドホールも格好で、ネックには金属製のフレットが刻み込まれている。弦の長さは（絃駒からナツトの間）は少くとも25.3/4吋、長いもので26.1/8吋となつている。高音三絃はナイロン絃、低音三絃はそれに細い銀線をまきつけてある。指板は平らで、サウンドホールの所では巾2乃至2.1/8である。第二、第三絃は三度その外は四度間隔に調絃される。

ギターは指先又は爪で弾かれる。Carl Engel が言っている通り、指先で弾くと、プレクトラムで弾くのちがつて、もつとデリケートな表現と色々な明暗とアクセントを思ふ存分出すことが出来る。かくて、ギターの場合、弓を使ふ絃楽器ではみられぬほど、奏者と楽器がびつたり結びつくのである。

現代のギター奏法を確立したのは Francisco Eixea Tarrega (1854—1909) で、現在第一級のギター大家達は、大体 Tarrega 奏法によつている。楽器の把持法も彼の工夫通り、足台を使ひ、左太腿に据えるのが常法となつている。Tarrega は又 Bach, Beethoven, Mazart, Haydn, Albeniz, Granados などの音楽を多数編曲している。スペイン最大のギタリスト Andres Segovia は、Tarrega 奏法に更に右指の爪を使ふテクニックを附加した。これは指先奏法に対して爪弾奏法と呼ばれている。ロンドンでスペインギターセンターを主宰している独奏家 Len Williams はこの Segovia 奏法の改良を「かくてギターは Tarrega の書斎から Segovia のコンサートホールに進出した」と言ひ「世界をあげて現代の指導的なギタリストは、Segovia 奏法によつている」と言つている。しかし、独奏楽器としてギターが今や不動の地位を占めていると考えること自体が重要である。Guitar Review 誌に Hofmeester Jr. が書いている所によると「今や Segovia は大きな難関に直面して、責任を感じている。これは彼が完成したギターの伝統をたやさないように、後進を指導し、公衆の前に新人を送り出すことである。Segovia は、ろくろくドレミファも知らない連仲が、今では顧みられないような旧式な奏法で、ギターの伝統が阻碍される危険がある、と心配している」と書いている。Segovia は自らギターのために400に上る曲を作曲し、編曲しているが、それがどれもこれもすぐれた作品である。

このギターの伝統を更に前進させるのに役立つのはブラジルの Olga Coelho と Laurindo Almeida である。Almeida は1947年ロスアンゼルスで Stan Kenton に見出され、1952年度ジャズ音楽の四人の第一級奏者の第一位に選ばれた、而も彼はジャズ系統よりもクラシックギターのスタイルを愛しているのである。フラメンコ奏法にかけては Vicente Gomez と Angel Iglesias がすぐれている。フランスの Ida Presti, ウルグアイの Julio Martinez Oyanguren, オーストリアの Luise Walker は特にすぐれてい、Walker はウィーンの国立音楽学校教授の要職に在る。アメリカではミネソタ州セントホールの Richard Pick が、クラシックギターの第一位を占め、Vahdah Bickford 夫人はアメリカのギター界の向上にあづかつて力があつた。夫人の編曲は夥しい数に上り、1923年にアメリカギター協会を結成した。

近年ではもつとすぐれた、洗練された音楽（例へば室内楽楽器として）によつて、ギターは音楽学生間に優位を占めるに至つた。ギターが他の楽器と結びつくことを非とするのはナンセンスである。寧ろ、他の凡ての楽器と組むことによつて、音楽の歴史の上に、特殊な遺産を残すことになるわけである。かくしてこそギターの音楽的進歩が成し上げられるであらう。

（高橋功・訳）

Andres Segovia (2)

アンドレス・セゴヴィア

Bernard Gavoty

高田三九 三訳

セゴヴィアを聞いた幾つかの夕のうちで、いつまでも私の思い出になつてることが一つあります。その夜は、曲目の中にはヴァイオリニストをびつくりさせる曲目、パツハのシヤコンヌがありました。あゝそれなのに、ヴァイオリン独奏のためのシヤコンヌ、神聖なシヤコンヌ、いまそれを聞こうとしています。——つまり何んと云いますかギタリストによつて冒瀆されるシヤコンヌを聞こうとしているのです。そして、スペインの婦人が、闘牛を見るように顔を被う、云いかえるならば、指をすこしひろげてその間から見るように。……

然し、セゴヴィアは慎重でした。彼はマルク・パンシエルの音楽理論に傾倒していました。そのパンシエルがたゞ、彼に「やんなさい」と云つておつたのです。一方、パツハがヴァイオリンのために書きなおす前に、最初はシヤコンヌをリュートのために書いたであろうことは充分に可能性のあることです。

まあ、そんなことはともかく専門家たちは、いわゆるやりそこないに終るのではないかと思つていました。然し吾々は純粋いよるこびを禁じ得ませんでした。それをきくことは何となくさめとなることでしょう。——さて——布をさくような音のするヴァイオリンの代りに、流れるごとく、自然なアルペジオです。

いつも少しよろめいて、胸がむかつくような二重音の代りに、はつきりした和音をはつきりした音の面の上に重ねられた。その声の各々はその個性をもっている、ポリフォニーをきかせてくれました。

そして、変化は相つらなり、変化という名に恰度ふさわしいものがあります。

どんな画工のパレットも今宵のセゴヴィアのギター程ゆたかな色をそなえてはいないでしょう。全く音色とニュアンスのぜいたく三昧です。

私はこのスペインの巨匠の勝利を胸におさめておくために、その翌日、なやめる、下手くそな或ヴァイオリニストから、手紙を貰つてこの反逆を批難し、彼の弓によつてシヤコンヌを演奏するから、聴きにきてくれという招きを受けましたが、私はこの幻影をこわされることを恐れて、その招きには応じませんでした。

ある日のこと、巴里のあるホールで、私は誰よりも一番近くでセゴヴィアの演奏を聞くチャンスを得ました。私はステージの上で、彼の傍に居て、彼のリサイタルに先立つて彼を紹介し、彼と会話をする光栄を得ました。

もちろん、このおしやべりはほとんどすべての場合、即席演説であります。私は充分準備をしてかゝりました。

私は一種の質問者としての準備をしていました。そしてこの有名なゲストの機智にあふれた即答を求めることにしました。それから、私は彼にその内容を話しておきました。そうしないと、それを暗記して、その不明を、云いかえるならば破綻をさけるために。

彼はどうしたでしょう。私は知りません。セゴヴィアは、彼の記憶を重くして、無味乾燥に落入ると思つたのでしょうか。あるいはそうかもしれません。

いつでも、私達がステージに上つているときはそうですが、私は彼の、ぼそぼそと語る声をきいて茫然としました。

「もしも私がまちがっていたら、しかたがないのですが……恰度戦場にのぞんだように」
それは、あく正しい言葉でした。
私達は取ることのできないとりでにとびつく元気な二人の兵隊のように、立つていました。

最初は、事はうまく運びました。私達はおのおの、その役目を知っていました。もし、二、三のためらいに身ぶるいしなかつたら、どうやらというところです。然し、私は無作法にもセゴヴィアにこんなことを云いはしなかつたでしょうか。

「もしあなたがまちがいをやつたとしても、心配しないで平気です。私がうまくそれをつくろつておきましょう。そんなことにはなれてますから。……」

すると、私の駄法螺は私に対してはねかえつてきて、この老練家が私が思つたとおり自分のわなにひつかゝるといふことになつてしまいました。

五つか六つ最初に答えた後ではセゴヴィアはテキストをすらすらと「自由に」しやべりました。そして熱を以て即席にやりだしましたので私はギョツとしました。

もし、突然私がセリフを云うのを止めてしまつたら？………そうしてもちつともさしつかえありませんでした。そしてセゴヴィアの突飛さは私を狼狽させました。人はこれをどう思うのでしょうか。

——あなたはおぼえていますか。と私は彼に云いました。ある日、版画の室の中で見付けた私達のもつている風変りな版画を。

その版画には三つの楽器を腕にかゝえているダヴィツド王が描いてありました。——堅琴のようなリュート、十三絃琴それからすべてのものを結ぶために大きな両刃の剣をもっていました。どうして剣を持っていたのでしょうか。

この質問に対してセゴヴィアは私にこう答えることになつていました。

「それはダヴィツドが征服者であると同時に音楽の熱愛者であつたからです。このようにして彼は野蛮人を征服し、またサウルを魅惑したのでした」

然し、彼は私達の協定を無視して、につこり笑い、脱線しました。

「それはきつと、ダヴィツドが前途に、音楽的な批判が現われるのを見たからでしょう」

「……」

「その正鵠には、——とわが冷血漢はしとやかに続けました。——ダヴィツドはあまりよい音楽家ではありませんでした。何故かといえばほんとの音楽家は恰度正直な男が警官を恐れないよう」批評家をちつともこわがりません。

「……」

私はまけました。完全にしやつぽをぬぎました。

私はこれをとりかえそうと試みました。

「師匠」私は云い出しました。「私はあなたに、非常に無遠慮ないくつかの質問をいたしたいと思います。」

「質問は決して無遠慮ということはありません。お答えは時にそういうことがあります。」

「全くです。………うゝ………さて、最初に貴方におたずねしたいのは、個人的の思い出なんですが。……」

「誰かの思い出を集めることは、それは十のうち九までは、その人の実を取るといふことです。」

その体裁は訂正することなく、ラテン人の完璧さをもつて、ほとぼしり出ました。私はスペイン風の人を馬鹿にした、聰明なまなざしにへきえきしました。決定的に……。

「あなたが膝の上にだいていらつしやるこのギターは、私の知っている範囲ではかなり古い奥さんですね。」

「いやいや、もし彼女があなたのおつしやるような古い奥さんでしたら、彼女は私のようなおじいさんの腕に身をまかせないでしょう。(ごけんそんでしょう。)ギターが古い歴史をもっていることは事実ですが、幸にも、私のもっているギターは非常に若いのです……。」

「けれども、ギターは女です。そうでしょう、男の気に入るために、彼女はいつもその外観を変えます。」

「犬も人間から離れないために、色々と形を変えて来ました。——羊飼の飼っていた大きな犬、これはその主人を孤独から守りましたが、そんな大形の犬から、ふところの中に入ってしまうような小形の犬まで色々とあります。」

「然しギターは女です。どうしてかという、彼女は気まぐれだからです。」

「いや、気まぐれというのではないのです。個性が強いのです。それは云いかえれば、何故、もつとも我儘なスペインの人達に愛される楽器であるかということになります。スペイン人は自分一人で社会を作っています。恰度ギターが、一人だけで、オーケストラに比適するように。」

私は汗をかき息がせわしくなりました。この外国人は私よりフランス語を上手に使います。そしてどんどんテンポを早めて行きます。

「然し、それでは、ギターの起源は何時にさかのぼるのでしょうか。」

「アポロンはダフネーを追求しました。その他にすべてのこれに関するものを追求しました。何故かといえばアポロンは彼によくこう云つていたからです。「走ることに精力を使い果さないようにしなさい。私はおまえを超越さないということを約束する。」ある日彼は彼を締めました。ダフネーは月桂樹に変わりました。この神聖な木を材料にして最初のギターが作られたのでした。私はそれがアポロンの娘云いかえるなら太陽の子供であるのがうれしいのです。」

尚、私はいつでもこれに、アポロンの性質を与えようと努力させられているのです。私はその順序や、光、均勢を好みます。私はそれに熱中することを恐れるのです。

「然しながら、このギターは激賞のよろこびにふるえています。快樂の音とでも云いましょうか。」

「グラナダではギターは一般的な楽器です。ギターはよろこびの同義語です。……」ある朝、ホテルで私は早く起きて、殆どおとむらいのような悲しい曲を一生懸命勉強していました。……連続攻撃をするように。女中さんが私に朝食を運んで来しました。

彼女は扉をノックします。私を見て、すっかり驚いて、こんな質問をします。

「おや、旦那さま、こんなに早く、そしてもうこんなに陽気に。」

人の空想をこわさないようにして貰いたいものです。その想像にはふれないようにしましょう。大衆の無智加減はこんなにも高いのですから、頭は星の世界につゝこんでいるのかもしれません。……

ビロードの炎が半ば開かれた目ぶたの中にもされました。私は息をついて、応対をし

した。——人物へのこの追撃。——再び熱をとりもどしまして。

「ギターを弾きはじめてのはいつ頃ですか。」

「生れる前からのような気がしますね。」

「ずいぶん勉強されましたか。」

ホールの中で蓮葉そうな婦人が頭をもたげました。私の質問が面白かつたのでしょう。私は判断しました。彼女の目の中には疑い深い仄めきがありました。そしてセゴヴィアがこれに対して、「いゝえ、決して」と答えるのをのぞんでいたようです。それは閑人の頭の中には芸術的の天分は奇蹟であり、努力とか忍耐とかは何ら関係のないということを強めるでしようから。

またその返答は私にとつても同様に彼女には意外だつたのでしょう。

「のろわれた人のように、——舞台の上に自由自在に天国の幻想をえがき出すためには。捷まず勉強しなければなりません。少しばかりの根気と、たくさんの素朴さをもつて遂にはこれが幸福を得る手段であると考えようになりましょう。……私の国の文学者は、勉強の訓練についてうまいことを云いました。

「ジャコブのはしごを考えてごらんさい。天使たちはこれを一段づつ昇つたり降ったりします。天使には翼があるのに。……」

「先生は何人もありましたか。」

「たつた一人。」

「どなたですか。」

「私です。」

「そして生徒たちは？」

「たつた一人だけ。」

「だれですか。」

「私です。私は私の先生であり、私の弟子なのです。こんなふうにして、半世紀にわたつてうまくいつているのです。」

「あなたの主張は何ですか。……つまり、あなたの芸術上の理想は。」

「一つの作品に対しては一つの表現しかないということです。その作品に与えることは、それがあなたに何物かを与えなければならないという方法でします。あなたは、きつと御存じでしょう。ナインの寡婦の福音を。」

たしかにそうです。然、もし私がナインの寡婦の現われるのを待つていたらどうでしょう。この喪に服している婦人と彼女をつれて来て泣いている人達はこゝで何をしようとしているのでしょうか。

答えをするより、恐れている好意を以て、私はほおえみましよう。

私はこの福音を好みます。それが終ることもなく、終つてもです。私は同様に一つの結末をそこに見出すでしょう。キリストは葬式の行列を止めます。その若い男を甦えさせます。そして彼をそのお母さんのところに、「彼は生きている。汝の息子をひきとりなさい。」と、こうつぶやきながら返します。

そこでその母はイエスにこう云います。

「主よ。あなたにとつてもこれは同様のことゝお考えになりませんか。私は彼をこの世に生み出しました。それは本当です。然し、彼をあなたは甦らせたではありませんか。」

これは私の考え方によると、創作者と、これを表現する者との対話といえましょう。

彼は非常に親しげな口調で自然な声でそれを云いましたので、誰も技巧を労した影を感じませんでした。

一方に於て、セゴヴィアは「言葉を作ること」をしようとしませんでした。彼は彼の考えたことを思った通り表現しました。その他は彼はそれをギターを手にもつて語りましょう。後刻彼はそれを取り出して。いまその愛器はピロードの布をはつた小さな暗い棺の中に休んでいます。

彼はこれを、大変注意深くとり出すでしょう。習慣は常々の儀式をそれで行うのにさゝげる尊厳を変えませんでした。

——張られた絃の上を布で愛撫し和絃をひいてから、花をつむようにアルペジオをひく。愛人を抱くように、そのギターを胸に当てる。心臓のすぐそばに。

「……あるユーモリストがある日、私にいいました。『ピアノは長方形のばけもので、歯を浮かせて、吼えさせてさせるもの。絃楽器はひとつばくようにしなければ鳴りません。ギターだけは説得に対して感じやすいものです。』

彼は非常に低く、彼の愛器の上に傾き、その声をもつとよくきこうとしています。彼女は彼に、長い物語りを、アンダルシアの古い伝説を物語るでしょう。

「それはグラナダでのことでした。私は思い出しました。昔むかし……

……句は途中で切れました。『恰度、地上で美しいすべてのものゝように、そして、その最後の言葉を云わないで亡びてしまつたものゝように。』

言葉はセゴヴィアが口で云い現わせない言葉を現わします。音楽はわれわれを夢の境地につれて行きます。そこのところまでは人類の言葉では表現できないのです。

どんな形容詞がグラナダを思い浮べさせたでしょう。然し、この巨匠の指は張られた六本の絃の上にせわしくふれて、コオロギのちゝと鳴く音、羽をこする音、キリキリという酸味をおびた鋸の音、ひきがえるの金のあぶく、眠つた夜の庭の妖精などをそこに出現させます。——そしてグラナダは夜のぼらのように、銀色の月の下にゆれて浮び上ります。 (完)

(2 頁よりつゞく)

Hector Villa-Lobos の小協奏曲もペーレンドのレパートリーで重要な地位を占めている。

ペーレンドに自作のギター独奏曲があることも注目されていゝ。即ち、Kleine Suite, Greensleeves, 2 Miniaturen, Estudio Italiano, Burgalesa, 2 Caprichos nach Fr. de Goya がそれであり、Alborada, Sevillianas, Trianas などフラメンコ風な作品もある。

その外、ペーレンドには Spanischer Ouverture (スペイン序曲)、Fiesta in Sevilla (セビリアの祭) Serenata espagnola (スペイン風セレナーデ) などのマンドリン合奏曲がある。

演奏家としてのペーレンドは若くしてドイツギター界の重鎮であるが作曲者としても編作者としても極めて有能である。その範囲が独奏に止まらず室内楽から協奏曲へと実に巾が広い。このペーレンドのレパートリーが現代ギター音楽の動向を物語っているように私には思はれる。

Message

Mario Castelnuovo-Tedesco
(Jan. 1 1957)

Dear Dr. Takahashi

.....

I was very glad to hear about the forthcoming performance of my 1st Guitar Concert in Japan by your pupil Yasuo Abe under the direction of Maestro Kojiro Kobune. I am sure the performance will be very good, and I hope the Japanese audience may like the piece. It will actually be the first performance not only in Japan but in Asia! Because although Segovia has played practically every where in Europe, in both Americas and recently also in South Africa, he never came to Asia during these recent years. And I am very grateful to you and to the good "propaganda" which your magazine ARMONIA made to my work and which resulted in this "Japanese debut"!

With all my thanks and best wishes I remain

most friendly yours

メ ッ セ ー ジ

マリオ・カステルヌオボ・テデスコ
(1957年1月7日)

高橋君 (前略)

マエストロ小船幸次郎氏の指揮、阿部保夫氏のギターで、私の第一ギター協奏曲が近く日本で初演されます由大変うれしく存じます。

この演奏が成功することを信じ、この作品が日本の皆様に好きになつていただけることを望みます。これはたしか日本初演であると同時にアジア初演でもあるはずです。セゴヴィアはこの曲をヨーロッパや南北両アメリカの各地で、又最近には南アフリカでも演奏しましたが、この数年彼はアジアでは演奏しなかつたからです。この日本デビューは、貴君がアルモニア誌で私の作品を紹介してくれ、その宣伝よろしきを得た結果であると存じ、感激している次第です。

私の感謝と善意をこめて御挨拶申し上げます。

最新刊アルモニアギター曲

テデスコ作	短歌 (高橋功の名による)	百部限定	200円
ムニョス作	ギター協奏曲 (ピアノ伴奏)		360円
サラサーテ作	コンパニー編	アンダルシア風ロマンス (バイオリンとギター)	200円
シヨパン作	ペロツト編	夜想曲 (シヨパンコンクール受賞作品)	100円
センシール作	祭の行列 (フラメンコスタイル)		50円
ア・ペロオ作	子守唄		50円

テデスコのギターコンチエルト の初演に際して

小 船 幸 次 郎

今度日本で初めてギターコンチエルトを演奏してみることにしたが、これは交響楽団とギターとを協奏させることに依つてギターの一般認識地位を高めたいのと、セゴヴィアでさえ大きな望みの一つだったコンチエルトを我々の手でやつてみたい慾望とが主観的な理由で、客観的な理由は第一にギター奏者の演奏技術が向上したこと、手元に交響楽団が有ること、音響の素晴らしい演奏会場が横浜に在ること、それにコンチエルトの管絃楽スコアが出版されたことなどである。

今回演奏するカステルヌオーヴォ・テデスコのギターコンチエルトは、二長調、作品九十九番で、一楽章アレグレット、二楽章ロマンツァ風のアンダンティーノ、三楽章リズムックで上品にの三章から成つて居り、比較的短かくまとめられてゐる。管絃楽編成は、フルート、オーボエ各一本、イ調クラリネット二本、ファゴット一本の木管に対して、金管は一本のホルンだけ、打楽器は二個のティンパニー、絃楽器は第一ヴァイオリン二、第二ヴァイオリン二、ヴィオラ二、チェロ二、コントラバス一となつてゐる。管絃楽としては極めて小さく、室内管絃楽の形になつてゐるが、これはギターの音量に対する数的考慮からであつて、音楽の内容、性質は普通のコンチエルトである。スコアには管絃楽とギターとのステータに於ける並び方まで指示してあつて音量に対する配慮は極めて深い。しかし音楽の内容から推して、絃の数はあながちスコア通り二本づつにする必要はないと考へるが、今回はスコアの指示通り、二本づつで演奏する。

音楽の内容については既にレコードなどで御聴きのことゝ思ふから記述は省くが、レコードでは気付かないがティンパニーを可成り屢々使つてゐる。絃は屢々分奏する様指示してあるから二人きりゐないとすると各々独奏になつてしまふが、独奏になると考へての技術的考慮など全然払はれていない。むしろ多数の斉奏を考へてゐる様に見える。レコードも絃の各パートに四人づつ位ゐる様に聴える。曲の最終部分は、スコアにはギターだけが絃の保続音に支へられながら主旋律を奏く様になつてゐるが、レコードではギターと共に木管が主旋律を吹奏してゐる。これは実際にやつて見て、ギターの音量が不足で終りらしい盛り上がり得られなかつたので変更したものと思はれる。我々もレコードの様に木管を入れることにする。

ギター独奏をする阿部保夫氏は先年セゴヴィアの教授を受ける為に渡欧し、イタリー・シエナのキジアーナ伯爵邸で開かれる年一度のセゴヴィアのギター講習会に出席して親しく教を受けて来たギタリストであることは今更説明するまでもなく読者は御存知のことゝ思ふ。管絃楽を演奏する横浜交響楽団は、昭和7年に私が創立した交響楽団で、純粹にディレクションの集りで、毎月一回の定期演奏会を会員制に依り行つて居り、終戦後の横浜市文化向上に大きな貢献をしたので横浜市から文化賞を貰つてゐる。演奏会会員券の120円と言ふ安価は演奏者が総て無報酬で出演してゐる為である。音響の優秀な神奈川県立音楽堂について紹介すると、2年前神奈川県が純音楽演奏の為に建てた純粹の音楽会場であつて、竣工までに東大音楽学教室に依り五回の音響上のテストを行ひながら建築していつたので、音響上では

ロンドンのローヤル・フエスティヴァル・ホールと並ぶ世界的音楽堂の一つである。

ここで聴くギターのコンチエルトは音響として最良の条件にあると思ふ。指揮をする私については自己紹介もお可笑なことだから他人にしてもらうが、兎に角、ギターは音量の点で合奏音楽的な現代音楽に仲間入りが出来ないのが実状だから、まづコンチルトをやつてギターの可能性を自他共に再認識したいと思ふ。この機会を逃さずギター愛好家の総てに聴いてもらひたいのが私の希望である。

カステルヌオーヴォ・テデスコ

ギター・コンチエルト演奏会

2月20日(水)夜6時30分

横浜市 県立音楽堂

ギター独奏 阿部保夫
指揮 小船幸次郎
管絃楽 横浜交響楽団

- | | |
|--------------|---------|
| 1) 組曲 鳥 | レスピーギ |
| 2) ギターコンチエルト | テデスコ |
| 3) 木管六重奏 | ベートーヴェン |
| 4) 序曲 秘密の結婚 | チャローザ |

会員券申込を早く! 120円 全部指定席
申込所: 横浜市中区山手町68
小船幸次郎

First Performance in Japan!

Mario Castelnuovo-Tedesco

1st Guitar Concert in D

Sorist Yasuo Abe

Cooducter Kojiro Kobune

with Yokohama Symphony
Orcheater

20 February 1957. p. m. 6. 30

Yokohama Music Hall

紹介

小船幸次郎: —

明治44年4月4日横浜に生る。戦前イタリアに学びローゼンストツク、モリナーリに師事す。昭和7年6月横浜交響楽団の結成にあたり選ばれて指揮者となる。昭和12年第6回音楽コンクール作曲部門に第一位となる。

ギター曲として「夜想曲」「随想曲第三番」などがあり、特に後者は十二音階によるモダンな作品として注目される。

照子夫人は古くから、すぐれた女流ギタリストとして有名で、今も弟子の指導にあたっている。

近く小船夫妻を中心としてギターのアカデミアが開設される由、今後の活躍が期待される。

阿部保夫: —

大正14年宮城県石巻市に生る。石巻商業出身。菅又新太郎に師事し、昭和23年上京。NHK新人テストに合格翌年ギタラ社主催の第一回ギターコンクールに第一位入選。自ら研究所を持ち、古賀ギター歌謡協会の講師を担当し、東京ギター四重奏団を率いてラジオ、テレビに活動。一昨年シエナのアカデミア・ムジカーレ・キジアーナに於てセゴヴィア、並にブジョールに師事す。

兄敏夫、弟慶司も亦すぐれたギタリストである。

LES GRANDS INTERPRETES
S E G O V I A

PORTRAITS DE ROGER HAUERT

TEXTE DE BERNARD GAVOTY



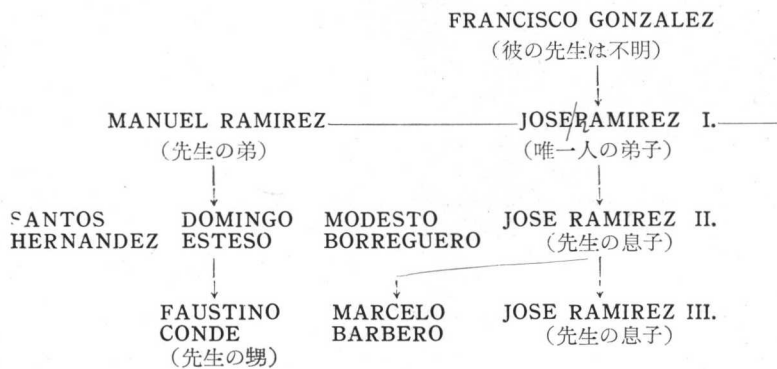


MANUEL RAMIREZ



JOSE RAMIREZ I

ラミレス系統の製作家



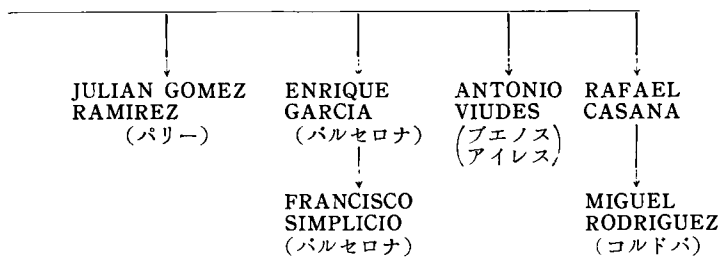


JOSE RAMIREZ II



JOSE RAMIREZ III

(1956年写)





ドイツギター界に君臨する Siegfried Behrend

批評集より

- 1953年 ベルリン 2月23日 ベーレンドは追従を許さぬギターの大家である。
 " ベルリン 2月25日 ロドリゴの音楽に於けるギターの音楽性とベーレンドの好演
 が全く間然する所なく、それは誰も拒むことが出来ない。
- 1954年 ロンドン BMG590号 ベーレンドは競ふ者なき第一人者である。
 " ベルリン 3月2日 ギターが果して協奏曲楽器としてその任にたえ得るか、
 いぶかつていた人達は、ベーレンドの演奏によつて杞憂であることを知つたは
 づである。
- 1955年 イスタンブール 6月9日 ベーレンドは現代最大のギタリストである。
- 1956年 イタリア 2月22日 ベーレンドの演奏会は最初から最後まで拍手の嵐だつた。
 " イタリア 2月25日 ベーレンドはギターの Paganini である。
 " アンカラ 2月20日 ベーレンドはギター界にとつては注目すべき現代の大家で
 あり、好楽家にとつては天与の贈りものである。

ラミレス一門

RAMIREZ-Family of Guitar Constructor

荒井史郎

Shiro Arai (Nagoya)

ギターと云へばすぐにスペインを連想させるが、流石は本場だけあつてギター製作の分野に於いても優れた製作家を生み出して居る。これらの製作家の中で我々の耳に親しみが深い名はラミレスかと思はれる、巨匠セゴヴィアのアペラドールは Manuel Ramirez の作品で我々はレコードを通して聞いて居るし、Jose Ramirez 2世の手になる10本程のギターが20数年前我国へも輸入され、又昨今輸入されて居る Jose Ramirez 2世、3世の作品等によつて実際に人々の手にふれ、生の音を聞いて居るからである。ラミレス家は現在主として Jose Ramirez 2世、3世によつて保たれて居るが、有名となつた製作家の中にはラミレスの工房で学んだり働いたりした人々が可成りあつた様である。Jose Ramirez 1世の師匠に Francisco と云ふ製作家があつた。Gonzalez が誰に就いて手工技術を習つたかは明らかでないが、兎に角偉大な製作家であつた。1867年に彼の製作したギターがパリーの音楽院に保存され其の楽器を手にした人々は一様に素晴らしさを賞讃して居るとの事である。19世紀の末期にマドリッドで亡くなつた。

彼の2世も立派な天才的なギター製作家であつたが、発明マニヤで今日の自動車に良く似たレバーで走る車の改良発明に財産を尽く投資し没頭してしまつた。然し彼の発明は失敗に歸し、人々からは軽べつされ、のゝしられ遂には斯うした失敗がもとで彼は死へと導かれてしまつた。

Jose Ramirez 1世は1857年マドリッドで生れ1923年3月11日66才で亡くなつた。彼は10才の頃、カルレータス通りにあつた前記 Francisco Gonzalez の工房に徒弟として住込み手工技術の基礎を厳しい訓練の下に習得し、一人前の製作家、技工となつた時、マドリッドのエル・ラストロで独立の製作家として工房を開いた。暫くの後カーヴァ・パーハ通に店を移転し其処で弟の Manuel Ramirez や Enrique Garcia に手工技術を教へ始めた。この二人の巨匠については後で述べるが Garcia が独立してバルセロナへ去つて行つたのに引續いて1世はマドリッド市のコンセプシオン・ヘロニマに店を移した。此処は Jose Ramirez 2世、3世の現在住んで居る場所であり、又 Manuel Ramirez が技術を習得した場所でもある。其の頃 Julian Gomez Ramirez, Jose Ramirez 2世は一生懸命に技術の習得に励んで居た。

Manuel Ramirez は1866年マドリッドで生れ1916年2月11日50才で此の世を去つた。彼は Jose Ramirez 1世の弟であるがギター製作に携つたのは1世が既に一人前の製作家となり独立してからであつた。兄1世の許で勉強し数年後店をパリーに開く為兄に援助を申入れた。1世は勿論自分の弟の輝かしい将来を祝福し、良き門出となる様数個の最高級のギターを製作して彼に与へ喜んで Manuel の為援助した。然し Manuel は斯うした準備が凡て整つた後、心變りがしてパリーへ行く代りにマドリッド市内サンタ・アーナに店を開き仕事を始めてしまつたので Jose をすつかり怒らせてしまつた。別に Jose は同じ市内で競争者が出来た事で恐れたのではなかつたが、何故ならば当時は2人のギター製作家に与へられる充分な仕事はあつたからである、斯うした Manuel の不愉快な態度が兄の心を裏切り傷つけたからであらう。此の事以来、長年続いた2人の親密な間柄は不和なものとなつてしまつた。其の後、Manuel はアルラバン通りに工房を移し此処で晩年を過した。彼は全く短期間

で偉大な芸術家となり、ヴァイオリンからギターのモデルを採り入れたりして研究した。彼は1世の伝統に従って三人の弟子を持ち教へて居る。三人の弟子、即ち Santos Hernandez, Domingo Esteso, Modesto Borreguero は夫々立派な製作家となつたが、たゞ Borreguero は性格的に荒れた人生を過したので前二者の如く有名とはならなかつた。然し彼は優れた技術を持つて居たとの事である。一般に Manuel Ramirez は偉大な Antonio Torres と関係を持ち一部では弟子であつた様に伝えられて来て居るが実際には何も関係がなかつたやうである。恐らく此の風説の原因は Manuel が兄 Jose の工房を去り自分の店を構へて後 Antonio Torres の当時の素晴らしい名声に心を動かさずに居られなかつた事から次の如きトリックを用いたからだと思はれる。Torres が死亡した時偶然にも彼は運良く Torres のラベルを手に入れる事が出来たので自分のギターが Torres のギターと同じ様に優秀である事を示す為に Torres の特殊な手法を真似て製作し一部のギターに其等のラベルを貼りつけ Torres によつて製作されたかの如くに見せかけた。其の結果其等のギターは玄人から賞讃の言葉をもつて迎へられたので前記のトリックを Manuel は人々に説明し乍ら真実を打明けたのである。Manuel は偉大な Torres の後継者と見做される様になつた。斯うした事から誤り伝えられて居ると考へられる。尚 Torres が弟子を残したかどうかは判つていない様である。

Enrique Garcia は1868年にマドリードでギター製作家の Juan Garcia の息子として生れ、父に手工技術の手ほどきを受けて後 Jose Ramirez 1世の工房に入つて腕を磨いた。手工技術の極意をたちどころに覚え1893年にはシカゴ博覧会で一等賞を獲得し名を挙げ1895年には Ramirez の工房を去り、バルセロナに自分の店を開いた。彼は死ぬ迄約30年間此處で住み其の間に製作芸術への完成の域に達し、Torres の特質のある技法ではないがギターのストラデヴァリユースとして知られた。只一人の弟子 Francisco Simplicio Garcia の後を継ぎ立派な製作家となつた。

Jose Ramirez 2世、Julian Gomez Ramirez が製作家として一人立ち出来る様になつた頃 Antonio Viudes が1世の許に入門した。Gomez Ramirez はパリに落着き最高の製作家の一人として有名になつた。彼が独立して数年後、或人が彼の製作したギターを持つて Ramirez 2世の所へ来て此のギターよりもつと素晴らしいギターを製作して呉れる様にと依頼にやつて来たが其のギターを丹念に験べた2世はこれより良いギターを作る事は私にも亦他のどの製作家にも不可能であらう、と云つた位素晴しかつたとの事である。1929年ニースで一生を終つた。

Antonio Viudes は古い伝統を持つレヴァント人の絃楽器製作家の子孫で1883年11月10日クレヴィレーンテに生れた。1897年14才の時にマドリードの Jose Ramirez 1世の工房へ送られて修業をし1909年10月ブエノスアイレスへ行き成功した。

Jose Ramirez 1世の工房へは他に Rafael Casana, Alfonso Benito, Antonio Gomez 等が入門し、Casana は修業の後コルドバに店を持ち、Benito, Gomez もどうやら一人前の製作家となつたが他の弟子達は一生懸命に励んだけれども素質がなく工房を去らねばならなかつた。此の数人の弟子の中には偉大な製作家 Torres の息子が居り、Ramirez 1世は一人前の製作家にするべく忍耐強く技術を教へ全力を尽したけれどもとうとう彼を見捨てなければならなかつた。そして彼に新しい職業に就いた方が良く若い Torres の息子に話した。自分が此の仕事に適しない事を知つた彼は、父を素晴しく有名にさせた職業を断念し他

の道に進んで居った。

Jose Ramirez 2世は1885年7月12日マドリード生れ、現在ではスペインのギター製作家の大御所的存在である。父の工房で勉強し、一人前の製作家となつてから後、世界を廻つて見聞を広める事を思立ち南米へ向つた。エクアドル、ペルー、チリー、ウルグワイ、パラグワイ、ボリヴィアを訪問し最後にアルゼンチンへ立寄り、ブエノスアイレスで一生住む事に決心した。然し5年後父1世死亡の後を受け止むなく仕事を引継ぐ為にマドリードへ帰らねばならなかつた。店を引継いで数年後セヴィリヤの博覧会で最高賞を獲得したので一躍彼の名は世界的に知れわたつていつた。

Jose Ramirez 2世の息子3世は1922年月19日ブエノスアイレスで生れ、まだ2才の時にマドリードへ戻つた。17才の年に父の工房で他の徒弟人と同じ様に材木をかついだり床を掃いたりして厳しい辛い訓練を受け、除々に父2世の豊富な経験の下に手工技術を学んで今日に至つて居る。

Enrique Garcia の只一人の弟子 Francisco Simplicio は1847年10月18日バルセロナで生れ、若くして芸術的な家具の木工場に従弟として入つたが自己の才能其の他周囲の事情から後にギター製作を志し、Garcia の助手として働く様になり1929年にはバルセロナで行はれた博覧会では彼のギターに賞が与へられた。Garcia が亡くなつて後も彼の工房を受け継ぎ名声を高め1932年1月14日に他界した。

Jose Ramirez 2世の弟子には Marcelo Barbero がある。彼は昨年惜しまれ乍ら亡くなつたが、一般に Santos Hernandez が Barbero の先生であつた如くに伝へられし居る。真実はそうでなく彼は Jose Ramirez の工房で弟子、奉公人として20の時、即ち1921年3月18日から1930年4月29日迄そして1939年4月17日から1941年3月8日迄の約11年間働いて居たのである。1930年から1939年のブランクはスペインに内乱が勃発したからである。Hernandez は1940年に亡くなつて居るし、彼とは個人的には何ら面識もなかつた様である。恐らく Barbero は彼の死後名声にまどはされて彼の名を利用しようとしたのではないかと推察される。即ち Hernandez の生前の友人、顧客と結びつく為に彼が残した工房で仕事をすることを未亡人に申し出て彼の工房で仕事を始めた。しかし仕事は長く続かず結局独立して自身の店を持つたが其の後に於いても Barbero は Hernandez の弟子であつたと人に話して居た様である。恐らく Hernandez の従前の顧客を引けつける事がより容易であつれからであらう。Ramirez は再三注意したとの事で「若し誰かが私に此の事に就いて問合せした時には真実を打明けるだらう」と彼に警告して居た。彼が亡くなる少し前に自分の誤りを訂正すると云つて居たが遂に生前に果す事は出来ず彼の家族が後日“Espana”と云ふ新聞に発表し Barbero は Ramirez の工房で手工技術を習得し、又奉公人として働いて居たと述べて居る。彼も亦立派な製作家となり、彼のギターを小原氏が日本へ持ち帰られた由である。

Manuel Ramirez の弟子であつた Santos Hernandez は1873年マドリードで生れ、10才の頃カトリックの聖職者の礼服を仕立てる店へ見習として入り、後 Valentin Viudes の工房へ入つた。又、Gonzalez の工房へも弟子として入り勉強した。後年彼は Manuel Ramirez の名声、新しいギター製作芸術に心を動かされて彼の工房に入り Ramirez が亡くなる迄其の店で働き Ramirez の製作上の極意を其の儘受け継いだ。彼の作品は全く優美な素晴らしいものであつたとの事で後のギターは全世界で賞讃されて居る。1940年に他界した。Hernandez は弟子を残さなかつたが只一人考へられるのは Alejandro Fernandez Picazo

で彼は20才の年迄 Herenandez の工房で徒弟として働き、20才の時に軍隊へ入って仕事は中絶してしまつた。軍隊から帰つて恐らく Hernandez は再び彼を迎へなかつたのであらうか、Ramirez の店へ仕事を求めて、自分の製作した数個のギターを持ってやつて来たが其等の作品は何れも良くなかつたとの事である。

Manuel Ramirez の弟子であつた Domingo Estesos は1882年5月12日クエンカ地方サン・クレメンテの村で生れ、若い時から Ramirez の工房に入つて手工技術を習得し、長年の間マドリードのグラヴィーナ通りで店を持つた。立派な製作家となつて成功したが現在は甥の Faustino Conde が後を継いで製作に携つて居る。

Jose Ramirez 2世、3世の弟子に Manuel Rodriguez がある。彼は2年程前に Ramirez の店を去つて独立した。Ramirez は彼が立派な製作家となるだらうと期待して居るとの事である。彼の父と Barbero は友人であつて同じビルの下で生活して居たので Barbero を良く訪問した由で其の事から Barbero と一諸に仕事をして居た様に誤解を受けて居た様である。

Ramirez 2世の息子にもう一人 Alfredo Ramirez があり小生とも文通があつたが1954年10月4日惜しくも28才の若さで此の世を去つた。

Ramirez 3世の息子、即ち4世は現在3才であるが3世の言によると彼も亦立派な製作家になるだらう玩具の動し方に素質、才能があるから、とユーモラスな事を云つて居る。マドリードのギター製作家学校は Ramirez によつて成り立つて居る由である。通常製作家は自分の仕事を出来る限り秘密にするとの事であつたが此の学校ではどんな重要な事柄でも製作に必要な事は克明に教へて居る。その結果多くの優秀なギターグループを生み出しマドリードの製作家を世界に於いて最も秀いでたものとして居る。

此の稿を終るに当り資料を御提供頂いた Jose Ramirez には誌上より感謝申上げる。

アルモニア誌16号の記事から Jose Ramirez は次の如く誤りを指摘して居る。

1. “スペインのギター製作家”の中で Mariano Cubas の蒐集に関して Miguel Borrull が有名な La Gitana Blanca の孫だつたと述べて居るが彼は Gitana Blanca の祖父であり、Guitana Blanca はギタリストでなく舞踊手である。
2. Sanches Granada が Manuel La Chica の作品を6本持つて居ると書かれて居るが、其の中の1本は Manuel La Chica の素晴らしいギターであるが、Santos Hernandez の作品は6本持つて居り愛用して居るのは Hernandez の作品で去る12月中旬にも其のギターで独奏会を開いて居る。
3. Mariano Cubas は Jose Ramirez 3世の友人で最近の3世の作品も彼の蒐集の中に加へられ、その中には Jose Ramires 1、2世 Manuel Ramirez の作品がある。

特 製 手 工 ギ タ ー

(音質清純、音量豊富、価格低廉)

楽器製作家 加 納 実

名古屋市昭和区長戸町2の28

Homage to Ramirez

ホセ・ラミレスに就いて

岩 橋 正 和 (八幡)

荒井氏のお世話で昨年の始めラミレスを入手した。当時銘器バルグスを持つてゐた私としては新作の楽器にそれ程大きな期待は持つてゐなかつたが、態々遠く名古屋から持参頂いた御親切は予期せぬ事とて全く感激した。

ケースを開いて見て感じた事は、形が古典的で女性的優美さである事と絃程が特に長い事であつた。製作は1955年12月と伺つた。音色明澄で高音部は特に歯切れの良い可憐さを思はせるものであるが、低音部特に第六絃は威圧されるバスの音量で腹にこたえる見事なものである。併し約50年の年代を経たであろうと云はれるバルグスと弾き比べると、作られたばかりのラミレスの音色は生硬さを免かれず歌姫の幼子と云つた感じである。けれどもセゴビヤが目下愛奏してゐるハウザーも廿数年前日本来朝当時持参してゐた頃はマヌエル・ラミレスに比べると問題にならない程の差があつたさうだが、年代味の差は争へぬものだと思つてゐる。

此楽器の特質を挙げると音質の点では絃を音響孔上で弾いた時と、それより上部の場合とブリツジ近くの場合と極端に変化する事である。恐らく十二音階の現代音楽用としては好適のものと思ふ。音色の魅力の点では1年後の今日では大分落着いて来たが、最近大改修を施したバルグスが異常な程好調振りを発揮してゐるので、50年の差は如何ともし難い。私は50年後のホセ・ラミレスの円熟した歌が聞かれないのが残念である。併し私の観ずる所では此のラミレスは新製の舶来ギターとして求められた場合、十七万円相等のものである事は断言出来るものである。勿論高価には過ぎるが之も如何ともし難い相場であろう。

絃程は第一絃で655ミリ半で中心巨離より0.5ミリ近接してある。第三絃と第四絃で656ミリで中心よりの巨離は等間隔である。第六絃で657ミリである。第一絃の12フレット上の絃高は3.8ミリ 第六絃で4ミリ半である。絃間隔は糸巻側のナット上で第一絃の絃中心から六絃のそれまでが4センチ強で、厳格に計れば4.1センチ弱であるから、舶来器の一般が4.35センチに比べると約2ミリ半程狭い。之は長絃程に依る運指の延びを調整する目的のためかも知れない。

ブリツジ上の絃間隔は又之れをカバーする気持であるのか、標準の5センチ5ミリに対して5センチ6ミリである。機構の上で一番目立つのはナットの糸受骨がブリツジの糸受骨と同様取はずしの出来るアタツチメント式である事と、ブリツジ上の駒溝が前述の絃程に応じて斜に掘り込まれてある事が珍しい。更に十二フレット上の絃高の差の如く糸巻側のナットもブリツジ上の駒骨も低音側はぐんと高く高音側は溝へ入る様に低目である。従つて演奏は至極容易で何の苦も無く高音部を歌はせる事は出来るが、低音側が少し高目過ぎて骨が折れる場合も起る。ナットの程間隔4.1センチと云ふのは左手のアポヤンドを行ふのに狭過ぎる感じであるので、4.2センチのナットと取換へられた方が楽であると思ふ。其際ナットの傾斜もブリツジの駒骨のそれも低音側の高過ぎる程度を適当に稍々低目に加減されて高音部の溝へ入る様に低目なのを少しばかり高目とされると高音の音質に腰のある力が加はり、低音は丁度釣合の取れた音量となる様に考へられる。

私は楽器を当り過ぎるので常に側近者の非難を受けてゐるが以上の事は一ヶ年私が

使用した結果に依る私見からの希望である。此の楽器で一等感心する事はフレットの仕上げと処理の巧みさである。第一フレットから第十九フレット迄の間で僅か0.5ミリの高低差を漸次配分して逐次低目の加減が出来てゐる事である。ギターのフレットは低目細目で無ければいけない事がこれで良く判るのである。棹の内反りは狂ひではなく、それを見越して作られた当然の機構である。高音側があれだけ低目の絃高でもビビらないのは内反りの効果のためである。ギターは常に正調に調絃して収めて置く事に深い意義がある。表板に割れの来る楽器程良く歌ふものである事実を私は多くの優秀銘器に依り数多く体験したが、ホセ・ラミレスは入手前既に割れてゐた。キューバのラモン・ボラスは満身創痍であつたし、バルグスは四ヶ所も割れてゐると聞いて割れに気を良くしてお世話頂いた始末であつた。割れ易いホセ・ラミレスは其後二回も割れて段々真価を見せてゐる。割れる程の表板なればこそ歌ふのである。

私のラミレス器

伊 東 尚 生 (岐阜)

昨年6月荒井士郎氏の御世話でホセ・ラミレス第一号(1956年作)を入手しました。ラミレス器は噂のように甚だよく鳴ります。軽く弾いても充分に美しい音が得られます。音色はキメが細かく、よく澄んでおり録音しますとそれが一層はつきりします。而も音量は豊富で、第一絃より第六絃まで平均しておりまして、速達性に甚だ富んでおります。古い銘器は屢々ステージに向かないと言われておりますが、このラミレス器はどうでせうか。古くなつてみないとわかりませんが、今は楽器が新しいせい、音色に多少の若々しさと硬さがありますが、古くなればもつと落付きとサビが出

て来て、一層よくなるのではないでせうか。私はそうな事を望んでおります。

現在私の手元には峯沢泰三作のギター三個とテルツギターがありますが、その音色には夫々の特色があり、その何れを良とするかは聞く人の好みにもよりませうが、私が最も好んでゐる作品(1941年作)は音色が柔らかく、誠に魅力的ですが、音量がもう少しあれば申分ないと思ひます。邦人製作家の一層の研究と努力によつてラミレス級のギターが一刻も早く作られる様になることを祈つてやみません。

銘器ラミレス

望 月 和 市 朗 (静岡)

私がラミレスを手にしたのは昨年の7月なので未だ半年しかその音を聞いていない。この楽器について色々の難点はあるにしてもその欠点はラミレス以外の人の製作したギターにも多少ある処の共通した欠陥ではないだろうか。これから申述べる事は私の所有するラミレスに就いて浅い経験から得た雑感である事を前以つてお断りする。幾年か経た後ならば詳細な記述も出来るかも知れないと思ふのである。

○音色について

濁音の無い清澄な柔かい音である、音に強さがないとも思はれるが自然な素直な音と言えよう。開放絃とその否とを問はず幅広く深い変化に応じられる。和音も調和のとれた美しさで感動を与えてくれる。

○音の敏感さ

絃の品質にもよるが普通のオーガストンを使用しての響は実に良い、人語にも響鳴する程敏感なので大変弾き易く早いアルペジオ、スケール等にも粒の揃つた音が得られる。

○フオルテについて

ギターの p はさして困難ではないが、f は音量の乏しい楽器だけに充分音を出すまでには訓練のいる事だ。ラミレスは絃が低く張られているだけに相当練習して軽いタッチが出来ないと絃がフレットにふれてしまう。私はブリツチを高くしたらと試して見たが音質の変化があつたので之を断念した。絃を強く弾いて音量を得ると云ふ事と音質の問題はデリケートだとしみじみ思つた次第である。

本場の楽器が欲しいと思ひ荒井さんに依頼したのがこのラミレスである。グリーンとレッドの花模様象眼はこの楽器の精緻さを現はしているかの様で美しい。私は毎日このラミレスから彼の国の音楽を、又教訓を得んものと努力している。私はこの楽器が高度な技術を持つて製作された事は信ずるが最高なものとは思はない。だが東洋の島国に居る私がこれ以上のものを今後入手出来るか何うかは判らない。長い伝統を守つて受け継がれたであろう尊い魂の創意と工夫で結晶されたこの楽器には、それ自体の持つ高貴な香りのするのは当然であり、誰もが知る事が出来よう。私はギターの持つ良さと又その限界音の程度を身近に知る事が出来た事は何よりもの収穫であり、この楽器で始めて柔かいセゴビアの音を地上のものと信ずる事が出来た。

私はラミレス氏に賞讃の拍手を送ると共に生涯をこの楽器と過す事の出来る幸を心から感謝する。

ラミレスのギター について

山 本 翰 (静岡)

私は、大家ホセ・ラミレスについて何の知識も持つて居りませんが、彼の楽器を実際に手にして得た感想を私の未熟な若い意

見ながら具体的に力一杯述べさせて頂こうと存じます。

昨年夏、荒井史郎先生と望月和市朗先生の御好意で求めました私の楽器は、フラメンコとコンサートの両方に使えるものです。資材はシーブレス(糸杉で白き材)、表甲、ピノアベート(ドイツ)、指板、パロサント(ブラジル)、ネック・セードロ(キューバ) だそうです。重量は非常に軽く、仕上げも胴を黄一色に塗られ明るく音色も明るい。フレットは細く極めて低い。ポジションの星はなく、私など最初は弾き迷いました。指板から絃の高さは弾き易い高さです。弾き続けるほどに良い音が得られます。高いポジションで少しビル音のあるのは私の力の入りすぎでしょうか。サウンドホールの周りの愛らしい木細工は一番の気に入る処で毎日恋人のように大切にしています。

1. 音量について 驚く程の音量はない。高いポジションにつれて音が小さいと云う事はない。5 から10ポジション位が却つて音量がある。低音(低い弦)と高音(高い弦)のバランスも良い。

1. 音質について 柔な音である。音質について慇を云うと限度がないと思うが、この楽器はありきたりに弾いていると唯、軽い、明るい音がする。低音が少し気になるのだが、ボーンと云う所謂、浸透する音がなくボガンと云う軽い巾広い音がする。重量感のある威厳のあるような音を得るに苦勞する。開放弦によくある悪い音はなく正確なタッチならば快い音です。

1. 感度について 感度も非常に良い。その為に爪の音は相当訓練しないと鳴つてしまう。指頭でも良いタッチでなければ摩擦音が出てしまうのではないか。ピチカツト・ハーモニックスは出易い。

以上、具体的に述べてまいりましたが、総じてバランスのとれた良い楽器と云えよ

う。示摘するような悪い個処がないのである。私の従来を力こめた弾き方では決して良い音は得られない。無駄な力を本当に抜いて演奏して始めてこの楽器の真価が分る。この楽器から良い音を得られる奏法が一番正しいのではないのでしょうか。鳴らす指を作るでなく鳴る指にしてゆく方が良い奏法にとどく近道であると思う。

私のホセ・ラミレス に就いて

縄 田 政 次 (大阪)

私の購入しましたラミレスは1956年製のもので、昨年の7月と記憶しています。故に大変新しくこの銘酒の本領を出すまでには相当の日月を要すると考へています。が、私の今迄所持しています従来の楽器と比較して、その長所を挙げれば先づ音色の丸味の内に輪郭のハツキリと澄み切っている事と、音の低音と高音のバランスの良さを第一に申し上げねばなりません。①の高音部は特によく、今迄に不満足であつたのを充分に満足させてくれます。低音弦の音色も実に素晴らしいと考へています。

ホールでテスト致しましたなれば、最前列も最後列も同じ位の音量である事である事を知りました。併し中央の列は後までよく音が延びますが、両端はさほど延びぬらしいです。

低音弦は、程よく音がよく切れて放弦等は雑音が少なく高音部に深く喰い入つてこない良さもあります。又従来不満足であつた③の音色も実に結構と思つています。いづれのギターでも舶来弦をかけても③だけは不満足でしたが……何しろ良く鳴るだけにミスですればそれも余計によく出る事として演奏に余程注意をすべきで、今迄のように気安く演奏出来ません。各コード共完全にフレツドの根元を押絃しないと良い音は

得られません。

特に私のラミレスは購入当初から掉が反つていたので、正しい掉の分と交換する約束で第2回東京レサیتالまでに入荷を待ちましたが、スエズ問題で遂に間に合わず不本意乍ら反つたラミレスで演奏しましたが、反つたギターでは本当の音が出なかつたと考へています。何しろ少しfを出すとすぐ音が割れてしまいますし大変弱りました。レサیتالも放送録音も終了後交換のラミレスが入荷しましたが、それもやはり反つています。欠点としては掉の反りですが、ギタリストには致命的です。これは西班牙と日本との気候の關係からではないかと考へますので近日中に河野賢仁に修理をして頂く事にしました。修理して音色に変化が起るか否かが心配ですが河野氏の優秀な技術を信頼しています。

以上で終りますが掉が反っているものの感想で充分な事も申し上げられず申訳ありません。本来なれば学理的に解明して御返事をすべでせうが御寛容下さい。

余談であります私がラミレスを購入したので当地のギターメーカーの某君の反感をかつたらしく事々に迫害を受けて弱つています。困つたものです。芸術を学ぶ者としてはギターにしる絃にしる良いものは良いと公言すべきで商業的に妥協は出来ぬ事と考へています。

アルモニア次号予告

Se renouveler on movrir

ギターに寄せて …Jacques Bregnet

ギター師弟論 ……………高橋 功

J. de Aspiazu 作品 ……………

Jose Duarte Costa の作品
……………中野 二郎

随 筆 ……………

添附楽譜 Breguet 編 Bach のメヌ
エツト

Galind 編ラ・クカラチア

もう大分前の事になるが、筆者が関係している合唱団のリサイタルが山葉ホールで開かれた時、終演後桐明学園の小沢征爾氏が「当夜の演奏を聴いていると音楽を楽しんでいる様に思はれ、我々が渦中にあつて苦しんでいる音楽と音楽に二つある様に思はれて変な気持ちになった。」と云つて居られたが、勿論音楽に二つある訳はなく芸術的にみて感覚性が麻痺してその快感のみを貪つて居る事に対する懷疑心から云はせたのであらうが、12月27日同じ山葉ホールで開かれた中林氏のリサイタルを聴いてこれと同じ感じを受けたのである。

中林氏はリサイタルの第1部の劈頭の一曲から自分の実力を出しきることの出来る演奏家である。それが好演であるかどうかは別として予め彼の実力を知つて居る人が期待する演奏を何時どんな条件でも恐らくやつて呉れる人である。彼がテレビや映画音楽で活躍出来るのもこの様な点が買はれているからであらうと思はれる。オーケストラと合はせたことのあるギタリストが異口同音に語る処は自分達が如何にも温室育ちで訓練が出来てなかつた事を痛感したと云う事であるが、指揮者や演奏家若しくは声楽家等がギタリストを使つてみて受ける印象はこの点であるらしい。何回も練習を重ねてやつと実力が出て来ると云うのではこの忙しい時代に間に合はないのである。当夜の中林氏は確かにこの点では条件に出版つた演奏家であることを示して呉れた。

然し乍らかういう意味で達者な演奏家になることはさして困難なことではない。何故ならそれは芸術の領域ではなく芸であり術であるからである。たゞギタリストの多くがこの様な必要に迫られない為か、或いは善く云えば芸術的探究に熱心の余りこの芸を身につけていない人が多い丈である。であるから往々にしてステーチに上ると上

気して実力を発揮し得なかつたり、オケ合せのやり直しばかりさせられる結果となるのであらう。芸術の魅力が我々を一つの魔法圈に誘うことにあること考えると、音楽会場に入つた聴衆を劈頭に魅惑出来なければその時の雰囲気は最早街頭のざわめきの延長でしかなくなるのである。中林氏の場合劈頭の一曲にこの意味で成功したことは大いに買はれていゝ技倆ではあるけれども彼の芸術性を云々出来ることにはならないと思う。

中林氏が今回のリサイタルに並べたレパートリーは技巧上簡易な曲を択び、逆に云えばポプユラーコンサートの難しさを加えると云えるかも知れないがそれを考慮に入れても昨今の斯界の活動から比較すればかなり安易な途を行つた観がある。勿論過重なレパートリーを並べて不快な演奏に終始するよりは数等良心的であるが彼の活躍する舞台が公共性のある面が多い丈にギタリストとして今一步前進したレパートリーを期待したのである。さうすることが彼の舞台を一層拡めることにもなるし斯界も声援を惜まないであらう。当夜のアルハンブラの想出や自作自演の人魚の唄に示されたトレモロを聴くとギタリストとしてむしろ失格した面を見せられたからである。

映画「太陽の季節」のテーマ音楽はリンゼイの雨滴れと云う原曲名が葬去られて了つた位の流行を示したがギター音楽の普及に邦画が大きな役割を果たした点では空前の事であつた。こゝに残された中林氏の足跡が大きければ大きい程斯界は中林氏の歩みに注目せざるを得ないのである。期待されたリサイタルではあつたが前述の合唱団と同様感覚のデカダンスに捉はれた感があり楽しかつた音楽会と割切つて帰つた聴衆も居たらうが筆者には我々の追求しているものはこれとは違ふと云う様にしか受取れなかつたのである。独自の領域を展開するつもりでいることが往々にして芸術の厳しさを逃避していることがあるからである。

一年近くも御無沙汰致しまして申し訳ございません。毎度アルモニア誌御送いたゞき有難う存じます。益々充実した内容を拝見致し御苦心の程御察し申上げております。

当地ブエノスアイレスは今夏格別の暑さで最高気温43.3度まで昇りました。街では死者13名を出し、気象台始まつて以来の記録とかで騒いでおります。

扱て、昨56年度の亜国ギター界は淋しいものゝように感ぜられました。アソシアシオン主催の毎月のリサイタルは例年通りでありましたが、インフレによる会場費高騰のために「ギター友の会」が成立出来ず、又演奏家各自の企劃によるリサイタルも殆どありませんでした。(もつとも Anido 女史だけは四回ほど演奏会を催しております)。その為か毎週木曜日のアソシアシオンの集会は大人賑はつております。教授推薦による模範演奏、意見の交換で会場はいつも活気に溢れています。

私昨年2月から Consaelo Mallo Lopez 教授に入門致して居ります。当地到着以来自分に最適の教授を選ぶことに腐心しておりましたが、今日やつとそれに恵まれて感激しております。Mallo Lopez 教授は Domingo Prat の高弟で Anido, Almiron と共に三大女流ギタリストの一人に数えられている方です。アカデミアを主宰され、後進の育成に専念され、教授としては当地の第一人者と認められております、レッスンが余りにきびしいので当初は仰天しましたが、無我夢中で1年経つてしまひました。Prat のメソッドを主とし、それに Aguado, Sor, Tarrega の教本を合せて使つています。

プラトの特殊テクニカは右手五本の指の平均した訓練を重視しておりますので、小

指も盛に使います。最初4ヶ月位は相当つらい思ひをしましたが最近右手演奏は完全だと言われましたので、少しホツとしています。でも只今毎週10曲ほどの宿題で、そのうち4曲は暗譜です。永年疑問に思つていた奏法上のこと、曲の解釈など少しづつ氷解してゆくようで、私にとつては此上ないよろこびです。

帰国は今の所いつになるかわかりませんがあと2年位勉強して参りたいと思つています。御参考になればと思ひまして、別便で昨年度の演奏会プログラムをお送り申上げました。

それからアルモニア添附の Gascon 作 Pena は「岩山」と訳してありますが「悩み」の間違ひではないでせうか。「岩山」は Peña です。念のため Irma Costanzo にもきゝ正しましたので一寸お知らせ致します。
(2月2日)

昨年11月4日、ソ連独立記念日を祝福して Teatro Smart で Grigory Rezanov 大使主催 Prof. Don Carlos Astrada の祝辞を以て Maria Luisa Anido の独奏会があつた。そのプログラムをアニドから送られたので紹介する。

- I. Gaspar Sanz 作 パバーナ
Ph. Rameau 作 メヌエツト
J. S. Bach 作 前奏曲
F. Sor 作 舞曲
W. A. Mozart 作 メヌエツト
D. Scarlatti 作 ソナタ
- II. M. Torroba 作 カステリア組曲
J. Rodrigo 作 小麦畑にて
F. Tarrega 作 ドレモロ
- III. H. Villa-Lobos 作 練習曲二番
J. Aguirre 作 二つの悲歌
M. L. Anido 作 アルゼンチン連作

海外ニュース

アメリカ:—

Mario Castelnuovo-Tedesco が元旦の挨拶に加えて、昨年は Shakespear の劇による三幕ものオペラを元旦から始めて、12月31日に完成した、まる一年を要したが、その間に若干の小品を作曲した。これまでに1,500枚を上廻る音楽を作曲したが、61才の私の仕事として不足でありませうか、とあつた。そして附記に、Decca DL-9832 のギター五重奏の Lp はきいてくれたか、RCA-Victor-LM 2050 の Heifetz 演奏の第二ヴァイオリン協奏曲もきいてもらいたい、尚 Schott から最近 Segovia の名に拠る Tonadilla とギターと室内オーケストラのための Serenade が出版されると報らせて来た。

Vladimir Bobri の編集する Guitar-Review 第20号はフラメンコ特集として発行された。前の第19号につづく第二フラメンコ特集で、Bobri の「帝政ロシア時代のジプシーとジプシーの合唱」や Hilda Terry の「Paella 覚え書」の外タプリンの Trinity カレツジのスペイン学教授 Walter Starkie が「Cante Jondo と Flamenco とギター」の題する注目すべき論文を寄せている。添附楽譜は Michael Fisher 編の Sevillinas と Variacion, Luis Maravilla の Serranas, Vladimir Gabaëff の四つのジプシーの歌と踊で、何れも好ましいフラメンコの曲である。Janis A. Burtneiks が英誌 Guitar News に連載した「ギターの起源 on the origin of the Guitar」の別刷合本が筆者自身から贈られた。アメリカには珍らしい真摯な文献学者で、その博識には驚嘆する。すでに The Secret of Cremona (クレモナ派の楽器) The Song of Songs (歌物語) の著者である。

フランス、イギリス:—

Guitar News 誌の発展は目ざましく、W. Appleby の編集によつて内容はますます充実して来た。33号から、アルモニア同様四頁のアート刷写真版を中央に折込ん

で、ページ数もアルモニア同様となつた。表紙に昨年7月7日から8月2日に亘るプロバンス音楽祭に於ける Ida Presti-Lagoya 夫妻の写真をのせ、トツプ記事に W. Appleby がその拝聴記をのせている。7月24日のギター二重奏演奏会のプログラムは

Lauffensteiner 作 ソナタ
J. S. Bach 作 Lagoya 編 ガボツト、
前奏曲とフーガ
Sor 作 主題と変奏
Carulli 作 ラルゴーとロンド
H. Ambrosius 作 大形式による小コン
チエルト
I. Presti 作 習作曲
Daniel-Lesur 作 悲歌
G. Dessagnes 作 パガニーニ変奏曲
Albeniz 作 タンゴ
Granados 作 間奏曲

琴瑟相和するこの夫妻の二重奏はまさにギター音楽のニユールクックで、是非永続させたいと Appleby は結んでいる。

その後10月28日には Salle Gaveau で Vivaldi のコンチエルト (原曲は二つのマンドリンとオーケストラ) を夫妻のギター二重奏と Fernand Onbradous の指揮する管絃楽で演奏して好評を博した。

パリの出版社 Pierre Noel がこのほど Wissmer のギターとオーケストラのため Pierre の協奏曲を出版した。所要時間21分という大作である。

Guitar News 33号は、その外 Lolita Tagor の写真と小伝、Victoria Kingsley の写真と「ギター伴奏歌唱法」などをのせているが就中 Miguel Abloniz の「運指法」の研究報告は注目値する。

Julian Bream の活動は全く目ざましい。昨年7月25日には Royal Albert Hall のプロムナード演奏会に招かれ、Sir Malcom Sargent 指揮の B. B. C 交響団伴奏で J. Rotrigo 作 Concierto de Aranjuez を演奏して絶讃をあびた。プログラムは B. B. C の常連で8月3日にはソルのロンド外四曲、9月3日にはバリトン歌手 Frederick Fuller と「スペイン民俗

の歌」に出演し、9月14日には Villa-Lubos のイ短調前奏曲外数曲を放送している。11月に入つて歌手 Peter Pears と共に4日には Tunbridge Wells 6日には Manchester の Houldsworth Hall, 7日 Kendal, 8日 Middlesbrogh, 9日 Newcastle, 16日 New bury と国内の演奏旅行にあり、18日にはロンドンの Festival Hall で J. Rodrigo の Concert de Aranjuez をフィルハーモニアオーケストラと協演した。全くものすごい活躍ぶりである。

最近売出しのフラメンコ奏者 Sadie Bishop は旅行者用宣伝映画「春のアンダルシア」の伴奏を受持ち Gomez 作 Granada Arabe, Jose de Aspiazu 作 Granadina, Sevillanas を演奏し、好ましい効果を上げている。

オーストリア：——

ウィーンでは、昨年度の Anido 演奏会で演奏された鈴木崋氏の日本舞樂が大変好評だつたし、Prof. Luise Walker は中野二郎氏の「Paganini 変奏曲」(イタリア国際ギター音楽作曲コンクール受賞作)をプログラムにのせるという親日ぶりを示している。

Prof. Rarl Scheit も演奏家、作曲家、編曲者として大いに活躍しているが、ギターリストとしての外リユート演奏家としても注目すべき存在である。昨年7月14—21日のイギリスの Haslemere 音楽祭には、リユート奏者として参加し好評を博した。シヤイトの演奏による「ルネッサンス及びバロック時代のリユートとギター音楽」と題する Lp (Vangard B. G. 548) の中には Dowland, Weissel, Milan, Newsidler, Visee. Logy, Weiss などの作品が録音されている。

学友古内広雄氏がこの度レバノンの公使からウィーン大使に栄転されたことは、私にとつて大変好都合で、日埃文化の交流に尽力してもらひたいと期待する。

イタリア：——

昨年10月6, 7日の両日 Reggio Emilia で Prof. Romolo Ferrari の主宰する国

際ギター協会の第十八回国際会議が開催された。6日夜の招待演奏会には先づ Heinz Bischoff が Hauser 製リユートで英、伊、仏、独西の古典リユート音楽を演奏して喝采を博し次いで Siegfried Behrend がドイツの Weissberger 製ギターで、Villa-Lobos, Castelnuovo-Tedesco, Turina, Torroba, Debussy, Ravel, de Falla, Albeniz, Granados の近代音楽を紹介し、最後に A. Vivaldi 作二つのヴァイオリン、バツソコンテヌオ及びギターのための Concert をベーレンドのギターで演奏して、満堂の喝采を博した。7日夜の招待演奏会には先づドイツの Marga Bäuml のギターと Walter Clasinc のヴァイオリンで Legnani 作大二重奏曲、Hermann Ambrosius 作舞曲、それに Paganini の Sonata を好演し、次いでベーレンドのギター独奏、最後に Mauro Giuliani 作ギターとピアノの Grande Concert が演奏され、多大の感銘を与えた。

フィンランド：——

フィンランドのギター界を代表する Ivan Putilin が昨年11月4日の演奏会プログラムを送つてくれた。曲目は

Chr. Gottlieb Scheidler (1752—1815)

作二長調ソナタ

Armin Kaufmann (1902—) 作 組曲

Feadinand Rebay (1880—1953) 作五の

小品 (以上 Ivan Putilin と Arto

Juusela の二重奏)

Franz Hasenöhl (1885—) 作 組曲

Alfred Uhl (1909—) 作 組曲

(以上 ヴァイオリン Wolde Jussila

ヴィオラ Erik Karma

ギター Ivan Putilin)

同封された写真(次号に紹介の予定)によるとプテイリンの弟子ユーセラは十二、三才の少年で、Helsingin Sanomat, Ilta Sanomat などの日刊誌は、この演奏会の好演を称讃し、ユーセラの演技に喝采を送っている。

スペイン：——

バレンシアの音楽学校教授 Prof. Patricio Galindo から本誌添附用として
(以下29頁につづく)

国内ニュース

シーズンオフで本誌に演奏会ニュースを紹介する資料に乏しい。

縄田政次編曲「世界名曲ギター重奏曲集」(東京都江戸川区小岩町2の3177 楽信社)が発刊された。二重奏七曲、三重奏九曲で、初級向、中級向、上級向と按配され、日本歌曲あり民謡あり、ラモールの古典からデ・ブリアの近代まであつて甚だ多彩。先生と門弟、又は楽友同志の練習に、演奏会に好ましい。

京本輔矩著「ギター上達の技巧法」(東京都新宿区東大久保1の450 国際音楽出版社)は簡単にして要領を得た、而も有意義な教程である。勿論著者もことわつている通り、限られた頁の中に多くの練習課題を提供し得なかつたうらみはあるが、それにしては良き師の下で、これをテキストとして活用出来れば、実に有効な教程たり得る必携の書である。

中央公論の第一回新人賞の深沢七郎氏は小倉俊氏の高弟で、その受賞作「植山節考」が去1月17日NHKの電波にのつたが、その音楽は深沢氏の自作自演だつた。

「展望」と題する謄写版刷12頁の小冊子が東京都杉並区下高井戸4の1001池ヶ谷一郎氏の手によつて発刊された。池ヶ谷氏はわが国マンドリン音楽界の古参の一人。今後の発展が期待される。

従前近藤恒夫氏の主宰していた「ギター芸術」が日本ギター芸術協会(大阪府茨木市稲葉荘33)から続刊の運びとなつて、2月上旬その続刊第六号が出るという。西日本方面のニュースが報らされるのが楽しみである。

グループ「キョーオン」が1月24日夜小原安正氏を囲む「ヨーロッパのギター現況に就て」座談会を持つた。こういう方法でギター音楽を心から心へ伝えてゆくのは望ましいことである。先輩は胸襟を開いて後進に接し、後進は努めて先輩の門を叩くべきである。

(28頁よりつづく)

南米民謡 La Cucaracha の編曲を寄せられた。編曲のよさが好ましい。近く本誌を飾りたいと思う。

レリタの Juan Riera が新年の挨拶にかねて、昨年末フランスに旅行しパリで Sor の遺作をマイクロフィルムに収めたので、近く送ると言つて来た。これは期待に値すると思う。

Wien の Prof. Jakob Ortner の2月2日附航空便によると去12月22日 Pujol 夫人 Mathilde Cuervas がバルセローナで70年の生涯を閉じた由。本誌14号 Pujol 特集号に写真を出して紹介したが、プジョールの演奏家として、作曲家として、古典音楽の蒐集家並に編曲者としての活動の影に夫人の内助の功があつたことが偲ばれ、このすぐれた夫人の逝去にあつてプジョールの悲嘆如何ばかりか、と案じられるのである。遙かにクエルバス夫人の御冥福を祈る。

Pascual Roch 著

伊東尚生訳・月村嘉孝註

最新ギター奏法

(タルレガ教程)

第一、二巻共 定価600円 送料各40円
限定出版につき早目に申込んで下さい。

申込所：岐阜市梅河町1の6

岐阜ギター音楽研究会

(振替名古屋6074)

取次所：宮城県亶理郡山元町坂元

アルモニア

編集後記

遅れ走せながら新年の御慶にそえて、茲に通刊19号をおとどけします。一部の誌友にソル特集号を予定しているとお案内申上げましたが、色々準備の都合があつて予定を変更しましたことを御了承下さい。高田三九三氏訳のセゴヴィアは第17号の続きで、これで完了となります。荒井氏のラミレス一門の玉稿と写真は海外に例をみないものでまことに得がたい従つて有益なものとし、本号の誇りと考えています。それに添えてラミレス所有の方々に感想をお願いしましたところ五氏に協力いただいたことも有難いことでした。

本誌の遅刊に就いて、私事にわたりますが一言弁明させていただきます。新聞紙で御承知のことと存じますが、赤痢菌発見者で、文化勲章受賞者で、仙台市名誉市民でもあつた志賀潔が、1月17日から床づいて同25日に老衰で亡くなりました。志賀は私の叔父でその主治医として甥の私が、その臨終をみたのです。その混雑に取り紛れて、心ならずも本号の遅刊となつたわけですから、何卒御了承いたゞきたく存じます。この号が出来上ると、法政大学出版局から上演する志賀潔伝を一ヶ月で脱稿せねばならない仕事が控えている現況です。

誌友の方々の希望で次号から質疑応答欄を設けることにしました。中野二郎氏、安達右一氏などに担当していたゞくことになっていますから、せいぜい御利用下さい。本誌独得の海外ニュースが本号では少く、短かくなつています。これは一に編集者の多忙のせいであつたことと御承知願ひます。もうすぐ次号の編集にとりかゝらねばなりません。海外からの寄稿など沢山出番を待っています。御期待下さい。

余寒きびしい折誌友の御自愛と御健奏を祈ります。そして春のシーズンの活躍を期待します。

海外楽譜・楽器・楽絃

スペイン	Union musical Espanola 版
イギリス	Schott 版
フランス	Max Eschig 版
イタリア	Ricordi 版
アルゼンチン	Ricordi Americana 版
アメリカ	Spanish Music Center 版
スペイン	Ramirez 製ギター
アメリカ	Augstin ナイロン絃(値下断行)

其他直輸入楽譜多数取揃えて御用命お待ちしております。

郵券16円封入申込の方にカタログ(日本語訳附)をお送りします。

名古屋市中区園井町3の3(三協ビル内)

荒井貿易株式会社

荒井史郎

誌 費 1 冊 100円(〒8円)

半年分 3 冊 300円(〒共)

一年分 6 冊 550円(〒共)

アルモニア第三巻第六号

昭和32年2月8日発行

編集者 高 橋 功
発行所 宮城県亘理郡山元町坂元
(振替仙台 8681)

印刷所 今 野 印 刷 所
仙台市土樋258